

北斎の「道中図」が近代の「旅行案内図」に与えたもの

——北斎と吉田初三郎——

市川正夫

はじめに

江戸時代に入り、五街道をはじめとする街道が整備され、物の流通や人々の往来が盛んになった。ところが街道が一般民衆の旅に利用されたのは、江戸後期であった。その人々の旅とは寺社や名所旧跡を巡るもので、その折に北斎や広重の描いた浮世絵による道中図が、使用されるようになつた。

明治時代後半には全国的に鉄道の開通で観光ブームが始まり、その際に京都出身の吉田初三郎（一八八四～一九五五）などによる鳥瞰図が貢献した。その鳥瞰図と江戸期の道中図は、縮尺など無視しデフォルメして描かれ、一般的に江戸または東京と京都、富士山等が入っているため位置関係がわかるものとなつていて共通点がある。

大正期には吉田初三郎をはじめとする絵師が観光地のある自治体や鉄道会社などから依頼されて、観光案内図が出版された。長野県でも『長野電鉄沿線温泉名所案内』や『軽井沢』、『観光信州』などの案内図が出され、日本全国だけでなく海外からも観光客を呼び込むようになった。これによ

り長野県は、温泉・鉱泉やスキー・スケート場、山岳・高原、神社・仏閣など豊富な観光資源に恵まれている利点を活かそうとしたのである。

道中図と旅行案内図についての論評には、堀田典裕（二〇〇九）が吉田初三郎の鳥瞰図、平田剛志（二〇一二）が鉄道旅行案内、三好唯義（二〇一五）が道中図について等がある。

本稿では、このように浮世絵による道中図が、明治に入り旅行案内図として利活用されていた点と、その特色と時代背景について論究してみる。

一 江戸期の道中図

（一）幕府等による交通地図

道中図とは、街道などの交通路とそれに付随する情報を言う。道中の宿駅や里数、寺社や名所旧跡などを入れたものである。江戸初期には徳川幕府が五街道をはじめ脇街道等を整備し、新しい交通体系を作り上げた。

これらを統轄するのが道中奉行で、宿場の取り締まりや訴訟、助郷の割当、道路・橋梁・一里塚などの整備を担当していたため、それらが道中図に描かれている。また山下和正によると道中図には「一般、街道、巡礼、目的地、講社、人生」があるとしている。

街道のなかでも江戸と京都・大坂を結ぶ東海道は、幕府にとつて最も重要な街道であった。そのため幕府は早くから、街道に関する情報が入った

地図を作成していた。それまで宿場や道路などの地図を基に、軍学者の北条氏長が東海道の実測図を作成している。

北条氏長が東海道の実測図をはじめとする街道図を、慶安四（一六五二）年に完成させている。その後遠近道印（おちこちどういん、藤井半知）が、元

禄三（一六九〇）年菱川師宣の挿絵による『東海道分間絵図』を発刊している。この地図は刊行道中図の代表的なもので縮尺・方位などが入り、実際とかなり近い実測図である。江戸日本橋から京三条大橋まで、途中の宿場間の距離や人足駄賃、問屋、一里塚、城下町では城主と石高などが描かれ、東海道を利用する大名にとつて参勤交代の折には必携のものとなつた。またこれは初版で縦二七メートル、折本ではあるが長さは二七メートルにもなる。そのため宝暦二（一七五二）年には、携帯版の『新板東海道分間絵図』ができる。

江戸時代後期は道中図の全盛期と言われている。『大日本道中行程細見記大全』（安政四年、一八五七）がその代表的なものである。地図には現在の北海道から九州までを網羅し、これの販売元が四八軒、四度の改定を行つていて、内容は宿場や大名と石高など記載していたが、横長のためは無視されている。さらに道中奉行により文化三（一八〇六）年『五街道其外分間延絵図並見取絵図』（東京国立博物館蔵、国重要文化財）が出来上がっている。これは実測図で五街道及び付属街道とその周辺の村、本陣・脇本陣、寺社・名所旧跡など詳細に描かれている。これは伊能忠敬の伊能図と並び、正確さと芸術性に優れたものである。

江戸時代初期から元禄の頃までの道中図としては、行基図を利用した簡単な地図しかなかつた。元禄時代から次第に庶民の旅が行われたため刊行地図が出回るようになつた。そのため大坂や江戸の版元により大量に印刷がされるようになつた。

幕末には浮世絵師五雲亭（歌川）貞秀による『東海道写真五十三次勝景』は、江戸日本橋から京都までを、街道と周辺部が全長十数メートルにもな

り、道中図の完成版と言える。

（二）庶民のための道中図

江戸時代初期から中期にかけては幕府による道中図が多くつくれたのは、一七〇一八世紀の元禄・享保の頃からで幕政の変化や富裕層の出現などにより、庶民の旅が増加したためである。そのため主な街道と宿場、それに寺社や名所旧跡が入った刊行道中図がつくられるようになつた。日本全国にある街道を中心に西国三三ヶ所や四国八八ヶ所、坂東三三ヶ所、相馬八八ヶ所、江戸六阿弥陀などの巡礼道中、伊勢神宮や善光寺・讃岐金毘羅宮など社寺巡り、「日光道中図」や「金沢江戸道中図」のように名所に至る道中図など庶民の旅ブームを引き起こした。

刊行道中図では幕府直轄地の五街道中心のものが多くつくられた。なかでも寛文年間（一六六一～七三）の『東海道路行之図』は最も古いもので、城下町とその藩主、石高が入つていて、これは初期の鳥瞰図といえるもので方位・距離を考慮せず、描かれたものである。さらに寛文一二（一六七二）年の『東西海陸之図』は日本初の陸海道中図で大坂から長崎までは海図、大坂以東は陸図である。

（三）北斎による道中図

江戸後期の道中図として代表的なものは、葛飾北斎の『東海道名所一覧』と『木曾路名所一覧』である（口絵参照）。『東海道名所一覧』は文政元（一八一八）年に、板元が嵩山房・千鐘房・衆星閣などによる東海道を描いた鳥瞰図である。この図では江戸は地図の右下、京都が右上、富士山が左上に配置されている。江戸には江戸城と日本橋が描かれ、東海道は迷路のようで、宿場や名所などもかなり細かい字である。しかし一枚の地図にこれだけ詳細に描かれているのは数少ない。そのため縮尺や方位などは